

風の時代は、「和の文化」を持つ日本の時代

一般社団法人アーネスト育成財団
理事長 西河洋一

財団の「経営と経済をつなぐ」研究会で話題になったのが日本型経営である。日本は戦略先ありきではない。組織先ありきで経営をする。いかにして従業員の雇用を守るかを日本の経営者は重視している。日本の経済指数が悪くなって日本型経営がまずいとなる。しかし原因は設備投資、研究開発への投資を怠ったからだ。先端技術に投資をした台湾、韓国に抜かれた。

もう一つの原因は、従業員への給与の支払いを抑えたことだ。日本経済を低調にした。円安も進み。国際比較で日本の所得水準は低い。株主重視と内部留保をしてきた。

中小企業は戦略重視と言っても戦略から取り組んではならない。従業員の能力とか、資金力とか、企業規模とかの会社の戦力を使うことが前提となる。次に持てる戦術を重視する。持てる従業員の能力を使って戦略を考える。日本の経営は会社を存続させることが前提である。

日本人は、農耕民族である。だからというわけではないが、最近農業を始めた。有機農法、無農薬農法で取り組んでいる。化学製品を使わない限り、農業は、経済環境に左右されない。今の世の中、体に良い食べ物を手に入れることは難しい。自分でつくることだと考え、自分で畑を耕して働き始めた。とれた野菜は、甘くておいしく体に良い。

風の時代、日本人の取り組む共生社会づくりに注目が集まる。戦いの世界は、そろそろ終わる最後の山場が来た。風の時代の中心は「和の心を持つ」日本だと思う。どういう世の中の世界になるかといったら、おそらく協調の世界、共生の世界である。

イスラムにしる、キリスト教にしる、一神教に対して、日本は多神教である。昔から八百万の神である。日本人はグローバルな考えを持っている。色々な考えを受け入れて仲良く暮らそうとする考えがある。

復活の要となるのは日本語の力だ。言霊ともいう漢字、字を見て意味合いを感じることができる。日本人は、漢字、カタカナ、ひらがなを持つ。日本語は、多様な表現力を持っている。

日本は日本語で書かれた「和の文化」を持つ。